

エッセイ、回顧録

アラビスト外交官の39年

塩尻 宏

(中東調査会参与、元駐リビア日本国大使)

本文はアラビア語専門の外務省員として39年を過ごした著者の波乱にみちた経験を回顧したものであり、2012年8月28日から2013年10月1日まで29回にわたって「ASAHI 中東マガジン」に掲載された回顧録を、そのまま転載したものである。最初の記載からすでに9年間が経過しているが、日本と世界を取り巻く外交関係が混迷を極めている現在、外交の舞台で活躍を目指す若者や、最近の国際関係について学びたいと考える人々にとって、何らかのヒントになれば幸いである。

第9回 『エジプト：南イエメン事前調査』

現在はイエメン共和国（Republic of Yemen）として一つの国になっていますが、私が2度目に在エジプト日本国大使館に赴任した当時のイエメンは、サナアを首都とするイエメン・アラブ共和国（Arab Republic of Yemen：以下、北イエメン）とアデン（正確にはアデン郊外のアッシャアブ）を首都とするイエメン人民民主共和国（People's Democratic Republic of Yemen：以下、南イエメン）に分かれしていました。当時は、駐サウジアラビア大使が駐北イエメン大使を、駐エジプト大使が駐南イエメン大使を兼任していましたが、それぞれの首都に日本国大使館の事務所はありませんでした。しかし、1974年5月に東京に南イエメン大使館が開設（北イエメンの在京大使館開設は1981年6月）されたこともあり、日本外務省は、

1975年には南・北イエメンに大使館事務所を開設する基本方針を決定していたようでした。それを受け、同年の秋に本省からの指示で、東京からのアラビスト同僚と共に事前調査のためアデンに出張しました。

事前調査で訪問した時の第一印象は、以前に勤務したスーサンの首都カルツームを思い出させる酷暑の中に、海岸沿いに荒涼とした火山岩の丘陵が迫り、街並みには人影もまばらでした。空港からホテルに向かう途中に見た区域には、5~6階建の一見近代的な建物が立ち並んでいました。それらの建物は、1960年代の後半まで続いた英國植民地時代に建てられたとのことでしたが、そこには殆ど人影がなくゴーストタウンのようでした。本来的に土地の生産性が極めて低い厳しい自然環境に加えて、典型的な社会主義国家の首都であるアデンの生活環境は、予想していたより相当厳しいものでした。輸入品も東欧や中国などの社会主義圏からのものに限られているためか、アデン市内に点在する質素な商店に並ぶ日常生活物資は質量ともに乏しい様子でした。特に肉類や野菜、果物などの生鮮食料品の入手は容易ではないように見えました。さらに、現地には外交官を除いては外国人在留者が殆ど居ないため、外国人子弟の教育施設は全く存在しないようでした。そのため、本省への報告書には、他の調査項目の結果と共に、「現地の生活環境に鑑みて、家族同伴職員の赴任は適当でない」との所見を記しました。



アデンの街並み（マッラー地区）(1975.9)

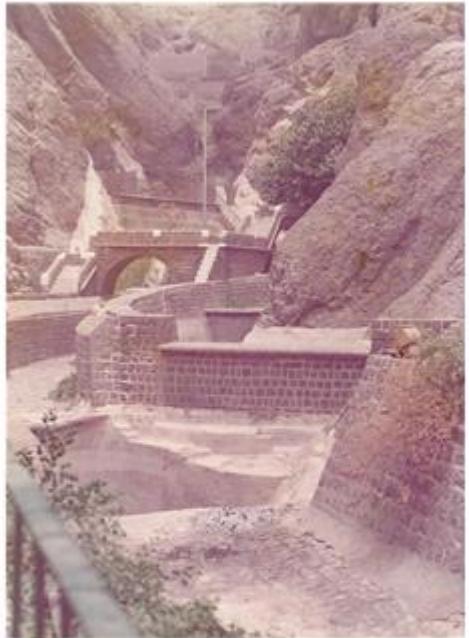
また、タイのバンコクと同じくらいの緯度にあるアデンは、日中の気温は年中通して 30°C を下回ることがなく、5月頃から9月頃までの夏場には最高気温は常に 40°C を越える常夏の地です。また、年間の降水量は 100 ミリ以下（東京の年間降水

量は 1,500 ミリ以上) ですが、湿度は常に 80% 以上で極度に蒸し暑い気候です。そのため、滞在中に訪問した各国大使館の館員も日常はポロシャツに短パンで過ごすのが普通で、社交行事でも上着ネクタイなしの半袖開襟シャツ姿が一般的のようでした。日本では 1970 年末から始まった省エネルギーが 2005 年からクールビズとなって夏場の軽装が奨励されるようになっていますが、当時のアデンでは既にスーパー・クールビズでした。

《幸福のアラビアから現代イエメンへ》

アラビア半島の南西端にあるイエメンは、ローマ時代の地理学者が「幸福のアラビア (Arabia Felix)」と呼んでいたところで、古代から中世にかけてアフリカ・中東・アジアを結ぶ交易の中心として、特に香辛料の交易で大いに繁栄していたことが知られています。読者の中には、旧約聖書やクルアーンにも登場する「シェバの女王 (Queen of Sheba)」の名前を耳にされたことがあるかも知れませんが、そのシェバ王国があったとされるところです。また、モカ・コーヒーで知られるモカは紅海に面したイエメンの積出港の名前 (Mokha) に由来することをご存知の方も少なくないと思います。

イエメンの北部地域では 9 世紀頃からシーア派イスラームの一派であるザイド派の指導者(イマーム)が支配権を確立しました。16 世紀にはオスマン帝国 (トルコ) の勢力下に置かれましたが、18 世紀半ばから東インド会社を通じてインドの植民地支配を確立した英國は、欧州とインド洋を結ぶアフリカ航路の要衝であったアデンを 1839 年に占領して直轄植民地にすると共に、イエメン南部を保護領としました。1869 年にスエズ運河が開通したため、それ以降のアデンは、インド洋と地中海を結ぶ世界で最も重要な海上交通路の中継地としてその重要性が一層高まりました。



アデン市内にあるシェバの女王の建設と伝えられる貯水池遺跡（歴史家の最近の検証によれば、ヒムヤル王朝時代の紀元 1 世紀頃の建設と言われる。）

その後のイエメンは、オスマン帝国の霸権衰退に伴い、第 1 次世界大戦後の 1918 年にサナアを中心とする北部地域がイエメン・ムタワッキル王国 (Mutawakkilite Kingdom of Yemen) として独立しました。第二次世界大戦後の新たな世界秩序が形成される中で、中東・北アフリカにおいても、欧州列強の支配を受けていた植民地や委任統治領、保護国・保護領などが次々と独立しました。また、民族解放運動の高まりは政治体制の変革をもたらしました。エジプト（1952 年）、イラク（1958 年）な

どの共和革命に続き、1962 年にはイエメンでも王制が打倒されてイエメン・アラブ共和国 (Yemen Arab Republic) となりました。

一方、英国の保護領であった南部イエメンは、1967 年にアデンを首都とする南イエメン人民共和国 (People's Republic of South Yemen) として独立し、1969 年にはイエメン人民民主共和国 (People's Democratic Republic of Yemen) に改称しました。東西冷戦の最中に英国との抗争を経て独立した南イエメンでは、科学的社会主义と称するマルクス・レーニン主義を標榜する共産主義政権が成立しました。1970 年代から 1980 年代にかけての南イエメンはキューバと並んでソ連の衛星国家の優等生と言われており、アラビア半島と東アフリカ地域におけるソ連の橋頭堡と見られていました。

1980 年代後半からソ連の衰退と東西の緊張緩和に伴って、南北イエメン統一への機運が高まり、1990 年 5 月に北イエメン（旧イエメン・アラブ共和国）のサーレハ (Ali Abdullah Saleh) 大統領が主導するイエメン共和国 (Republic of Yemen) が成立しました。当初は

旧南イエメン指導部との軋轢から政情不安が続きましたが、1994年の内戦を経て、サーレハ政権が確立されました。その後、2011年からのアラブ世界の民衆蜂起の余波を受けて、サーレハ大統領は2012年2月に退陣を余儀なくされましたが、北イエメン時代を含めれば30年以上にわたり同国の最高権力者として君臨したことになります。

20世紀半ば頃までのアデンは、アジアと欧州とを行き交う全ての船が寄港していましたので、明治維新後に欧州を訪問した日本人たちも途中の寄港地の一つとして同地に立ち寄ったものと思います。また、1890（明治23）年に日本を親善訪問したオスマン帝国海軍のフリゲート艦「エルトゥールル号」が帰途に和歌山沖で遭難する出来事があり、その生存者69名を日本海軍の巡洋戦艦「比叡」と「金剛」が当時の首都イスタンブルに送り届けました。その時の記録によれば、「比叡」と「金剛」は1890年11月30日にアデンに入港し、12月3日に出港したとあります。後日その事実を知って、思いのほか古くからの日本とアデンとの繋がりを感じました。

《駐南イエメン日本大使の信任状奉呈》

上述のとおり、当時は駐エジプト特命全権大使が駐南イエメン特命全権大使を兼任していました。1976年度予算で北イエメンと共に南イエメンにも日本国大使館事務所の開設が認められたこともあるって、在カイロの南イエメン大使館を通じて当時の魚本藤吉郎駐南イエメン特命全権大使の信任状奉呈式の日程調整を申し入れました。その結果、同年11月に魚本大使がアデンに赴いて当



クレセントホテルの全景
(TOURISM IN DEMOCRATIC YEMEN, issued by
Public Corporation for Tourism, PDRY, 1976より)

時のルバイア・アリ（Salem Rubai' Ali）大統領（正確には大統領評議会議長）に信任状を奉呈することとなりました。信任状奉呈式に先立って南イエメン外務省との事前打合せのため、前年の事前調査で出張してアデンの事情を知っている私が、事前に現地入りして信任状奉呈式の最終的な日取りや当日の段取りなどを確認することになりました。

信任状奉呈式は重要外交行事の一つですので、在エジプト大使館から若手の書記官が応援出張してくれることとなりました。当時はカイロからアデンへの直行便は週に2便ほどの南イエメン航空のフライトだけでしたが、魚本大使にはそれを使ってもらうこととしました。私と応援の書記官も同じ南イエメン航空の1便前のフライトで3日ほど前にアデンに赴き、当時現地で最高級ホテルとされていましたクレセント・ホテル（Crescent Hotel）に大使と私たちの部屋を確保して、先方の外務省とに事前打合せを行い、大使の到着を待つことになりました。アデン港の近くの広場に面したクレセント・ホテルは、古ぼけた3階建ての木造建築で、閑散としており、私以外の宿泊客は居ないようでした。何かの映画で見た植民地時代のインドや東南アジアにあったヨーロッパ人専用のホテルを感じさせる雰囲気があり、煤けてはいるが豪華な食堂のシャンデリアや Crescent Hotel と銘が入った食器類から、由緒あるホテルであることが偲ばれました。カイロの日本大使館への報告は、稀にしか繋がらない国際電話は殆ど役に立たないため、アデンで唯一の電報局である英國系の Cable and Wireless Co. を経由した電報で行ないました。

私たちが到着してから3日ほどして魚本大使がカイロから無事到着し、駐南イエメン特命全権大使としてルバイア・アリ大統領に対する信任状奉呈式が予定どおり行われました（記録によれば1976年11月14日）。当日は、わが方大使と私及びカイロから出張してきた書記官が、南イエメン外務省手配の車列にてクレセント・ホテルを出発し、少し離れた小高い丘の上にある大統領官邸に向かいまし

た。厳粛に行われた信任状奉呈式の後、魚本大使とルバイア・アリ統領との間で極めて友好的な雰囲気で懇談が行われました。信任状奉呈式及び大使と大統領との歓談などの通訳は私が務めました。その大統領が1年半後に処刑されることになるとは、当時は思いもよらないことでした。

魚本大使の信任状奉呈式の際に、ちょっとした、しかし、私にとっては忘れられないハプニングがありました。大使より1便前のフライトでアデンに赴いた際に、私のスーツケースがカイロで積み残しになりました。すぐに連絡して3日後の次便で届けてもらうよう手配しましたが、積み残されたスーツケースには着替え用の下着などが入っていました。機内持ち込みの手荷物はいつもの如く書類だけでしたので、カイロに積み残されたスーツケースが届くまでは洗い替えの下着もないままとなりました。前にも書きましたとおりアデンは極度に蒸し暑い常夏の地ですので、下着は毎日着替える必要があり、仕方なくその日に着たものを寝る前に洗面所で洗濯して翌朝までに乾かして再利用する日が数日続きました。私のスーツケースを運んで来るのは3日後の深夜に到着するフライトで、それには大使が搭乗していました。その当日は我慢して洗わなければよかつたのですが、何気なくいつものとおり洗った下着は乾く時間がありませんでした。そのため、失礼ながら下着なしの短パンとポロシャツ姿で特命全権大使の空港出迎えをすることになりました。もちろん、大使はご存じなかったと思いますが、その時のことを思い出すと今でも冷や汗が出る気がします。

《エジプトから南イエメンへ》

駐サウジアラビア大使が兼轄していた北イエメンの首都サナアには、1976年12月に駐在官事務所（対外的には日本国大使館事務所）が開設され、並行して南イエメンの首都アデンにも同様に駐在官事

務所の開設計画が進められていました。前述のとおり、1975年秋に私自身がアデンに赴いて実施した事前調査でも「現地の生活環境に鑑みて、家族同伴職員の赴任は適当でない」と本省に報告していましたので、単身者の誰に白羽の矢が立つのかと思い巡らせていましたところ、1977年早々に在エジプト日本国大使館の上司を通じて、「在南イエメン日本国大使館事務所開設のために近々塩尻にアデン出張駐在を命じる予定」との内示を受けました。当時、私は、カイロに家族（妻と6歳及び5歳の息子）を同伴していましたので、大使を始めとする上司に事情を説明して再考の可能性を打診しました。しかし、具体的な回答が得られないまま同年3月には正式に「アデン出張駐在を命じる」との辞令が出されて、アデンに日本国大使館事務所を開設する役目を仰せつかりました。私にとってはまさに想定外のことでしたが、人事上の都合で、他に適当な人が見当たらなかつたのだろうと自分を納得させて準備を始めました。

現地の生活環境に鑑みて家族を同伴することは困難と判断されたので、私が単身赴任することにしましたが、外務省の規則では、私の在勤地はアデンとなるので、カイロに残留する家族は同伴家族とは認められず、それまで支給されていた同伴配偶者手当やカイロでの住宅手当が支給されなくなることが判明しました。若輩の職員が、アデンに駐在しながらカイロに残留する妻と2人の息子の生活を私費で賄うことは困難でした。当時の在エジプト日本国大使館の上司に善処を再三懇請しましたが、打開策が見出せないまま赴任の時期を迎えるました。

赴任準備に当たっては、現地では必要な事務用品の入手も容易でない状況でしたので、自分の身の回り品に加えて公式文書の作成に必要な用紙やコピー用カーボン紙等と英語とアラビア語のポータブル・タイプライターを携えて行くこととしました。親公館の在エジプト大使館から若手書記官1名が同行して、着任後数日間の業務を支援してくれることになりました。1977年5月の或る日、私は応援

の書記官と共に夕方のカイロ空港から南イエメン航空（ALYEMDA）直行便で出発し、深夜アデンに到着したのを思い出します。取り敢えず、タクシーで市内のクレセント・ホテル（前出）に入りました。独立前の英國植民地時代のアデンはアジアと欧州を結ぶ海上交易の中継・補給地として活況を呈していたことは様々な記録からも窺がえます。往時のクレセント・ホテルは、アデンで唯一の高級ホテルとしてアジア・欧州航路を行き来する多くの著名人が宿泊して賑わっていたようですが、私が赴任した頃には閑散として、他の宿泊客を見かけることは珍しい状況でした。数少ない従業員たちは特に不親切ではありませんが、社会主義国特有の無愛想さでした。（続く）